



今月今日 拜見被

まゝの借といひあつた

平は

書つて

秋のおれ

先仲の不遇ヲ

よめ

海に流る女

朝夷巡嶋記全傳第五編卷之四

東都 曲亭主人編輯



後輯第四七

出居の拏絆繩

邁遭の矢口渡

却說葉二郎ハその日今巷路多。和田義盛の新第へ校枝が饋物の一包を齎邁て守戸が回翰を取ってける。めくは障るものかえれば、やうやく小
心おちぬ、今宵も亦彼小町が客店に曉り、この地の風聞を傍問や異
事多かる。さへ、六原来冠者御夫婦も恙なく、とをいひ、さへ、
後やまゝ心後々疲勞を増せども聊も懈らば、翌も未明、宿をたひ、
又只管、急ぐまゝ、十餘里を輒く来り、矢口の船母を、比申の時、
些し過る、折前、面より、東の岸より、漕渡り、船を遙か、久し、久し、



舟車の渡



舟車の渡
舟車の渡
舟車の渡
舟車の渡
舟車の渡

舟車の渡

回翰を取り終る半响なりと運滞せざる兄よの誠なり彼方なるハ不実之
 とせせり。がやせり。と云ハ難く。贍る空は鳴後れ。杜鵑只一声の玲々不
 歸とせり。バけハ。帰す不如と尋思して遂に踵を旋り。又いづくの路
 走りて今宵ハ。波谷に宿投りけり。又虫責られ蚊は叫れて。睡られぬ隨に夫口の
 舌を多バ本意を限り。あはれ値んま。のありけり。とむりハ。之共樂く。目
 睡りせぬ。よ。曉る。旅宿の床を起出。且閑涼。地風は吹れて湯島の
 岱も来ま。ければ。東を過。眺る。小上總の海より日八升。辰牌中を過
 ざらる。あ。亦復急ぐ程。熟る。路八十餘里。鄰へ如。心地。と。その
 日申の比。及。太田の莊へ。か。着ぬ。角門より入る。足音は。校枝ハ。を。出迎。と。
 あ。いと。早。と。勞。ハ。藁。二。郎。背。ま。せ。祇。包。を。解。お。ろ。と。校。枝。小。速。与
 して。の。多。う。又。回。翰。ハ。こ。の。中。は。あ。ん。ん。れ。危。漏。水。も。一。頃。日。頻。に。お。の。り。

入。自。覚。れ。バ。そ。の。程。鹿。乃。水。焚。絶。一。の。を。僕。ハ。土。足。序。水。汲。入。れ。と。馳。て
 お。ん。ま。づ。姫。入。り。又。回。翰。と。を。せ。お。の。り。と。校。枝。ハ。禁。め。あ。を。と。ま。
 今。急。ぐ。や。ゆ。ぬ。草。鞋。を。解。て。休。ひ。又。ゆ。が。あ。姫。入。り。云。云。と。ヤ。あ。び。て。歎。
 ま。ま。と。く。又。坐。邊。へ。ま。り。又。と。回。答。て。ま。終。祇。包。を。引。提。と。奥。を。赴。け。る。こ。の
 日。間。中。守。直。猛。は。鄰。郷。の。莊。官。許。招。れ。出。中。一。俣。の。あ。ど。還。ら。ぬ。見。姫。ハ
 そ。の。多。彼。愛。心。か。る。夏。の。雲。俟。ハ。夕。の。雨。か。く。暑。日。消。し。左。右。小。扇。難
 ち。折。し。も。あ。れ。今。藁。二。郎。が。女。り。と。校。枝。ハ。走。り。跌。く。ま。ま。被。一。包。を。め。と。ま。
 然。ハ。且。見。姫。ハ。海。を。撈。り。珠。を。り。ぬ。心。地。ハ。そ。を。お。の。り。早。に。見。
 又。回。翰。を。賜。と。ゆ。と。疾。そ。の。包。を。解。て。と。い。い。を。校。枝。ハ。二。包。の。包。を
 解。披。け。守。戸。が。回。翰。あ。ら。れ。や。り。封。推。断。と。れ。を。先。光。仲。の。無。事。に。
 此。度。の。姫。入。り。進。ら。せ。ぬ。二。包。を。早。速。に。せ。お。の。り。せ。一。云。云。と。宣。へ。

請勸を兒かへとぬりありてこの便り届け進み吾侪へもと跡に餘の
 鮮を賜て勸ひたりこの頃ハ其の殿の猛は移後のすをりて今巷路の東北
 御館へこの移らせあり終局をこの鹿破を何なりとておつたはる御伊入
 後の日中をこれらのゆきと書しと書し且見姫ハ云云と校枝が讀むとち
 づとそハ俄頃の移徒ゆく倉卒あり折りてお更ゆく整へられしをそこの
 とをせぬ天々かぬ誠心中をおられおと郎の兒回翰とておつて包と
 引きてその一包を披けく分回翰とわがけりめハあやま裏まが贈りし
 尺素の封皮を断ち方のと像見の扇と巻筆で舊の依り返されりあはくは
 とぞりの小主徒忽地與醒くをぬるる受どもおと郎のあぢりおん回
 翰の中はありぬと紫の服帯包を解披けこれ中も副翰と包筆
 て返されり訝りたり限りもかれが尺素おと郎の筆は誤りしを心よ

みかく返をぬりてて副翰の裏に識せしめをあれはつて
 引くしとえれば一首の歌ありて忘れてもこれや汲んこれも高野の里に玉川の
 年魚三行半は書し是疑はくもあぬ光仲の迹に且見姫ハ返りてかへり
 うの吟しと校枝ハ何と笑ふをそはれ弘法大師の忘れても汲わあらん旅人の
 高野の奥の玉川の水とよあせあり歌をよみ大師の歌ハ紀の玉川の
 清はな愛く旅人の玉川の名と忘るるも汲わぬ過ら汲つてと愛誇りありと
 歌のあらとぬあぬぬの中葉あり謬て紀の玉川の毒水とせんがを高野大師の
 云云と詠みひとのひりて帰へるあり玉といふ名を負し清は流は濡れぬ
 汲む人もあくなり一が用象神の怒りてぬその淵崩れ水涸く今八名のを送せ
 とそ家尊の大人の宣ひるるに伏の歌ハ世の俗の謬傳へる隨に紀の高野の
 玉川ハこれ名を毒水とせんが武蔵の高野の新玉川の餘の鮮もこれ

愛やと詠まへりやうとあつめと巻の蓋と校枝を取らして見ぬわが
 舊の俣ゆき只一ツを彼らに留められりとわが心を引くも俣ゆき
 鮮の色の何となく初ま変りやうと詠れ歌はる故多と受もな疑ひ
 折らる畜猫の鮮の香とや鶯慕ふ且見姫の後方より袂の下と潜りて
 器の中を鮮ひる爪推立と引落とを校枝にあらと噫姑麻正かたを
 せほもあれ退むと叱きと鮮引衝と些も放る眼と先の背を振りて
 嘯鳴威して片隅の簀戸のほろりへと邁るかの晝鳴の件の鮮とや
 啖ひ竭はるとえ猫ハ忽地四足と乱とくち遠とを救回同苦む声いと
 悲しく夥しく血と吐くそが休息ハ絶はり珠ハ怪ハ形勢ハあかく駭く主従ハ
 斃れ猫をいと惜むも竟もその甲斐ありと且と見姫ハあハ沈と
 頭を擧て涙と目と押拭ひ喃校枝曩も吾侪が封と鮮ハあハ聊も

異あふくも必ばざり一は斯も烈しく物と害の毒を如くも丈夫は蕪
 一ハ誰が所為かんと見且見が所行と坐は猜し憎も憎も飽ととな
 けはハ筆子怒りの色を離別の状に擬へ三十一字と云云と三行半の
 書ありん現をあらた伎倆を何と恨むと枉更と妹伏の中と疏をを
 吾侪ハ去らるとも毒ありけりととやと曉りて返させ更ハ丈夫は恙
 こそ幸ひわれとをり多ひ掃をよこの濡衣と誰ハ亦とが為か乾きのあ
 祈り神や捨らと過世をを忍びあを声も立と泣更ハ校枝も俱
 禁むと涙と墨とと見理りも情かあや怒り召は誠心の今ハ彼
 届らぬとも姫うへ科あべとを勸めせとさハ心苦し
 譬も物も情もあやをぬ鮮の毒も疑ひかたを叔母のともあを
 制めくも声高しと守戸が所為か死渠り人は相譚れとわう

鬼くし奴伎倆をせむ袋の底より物の漏る鮮を返して毒ありと明々地は
 知らんやこはその中は所以あるん蒙二部を召すきり氣あけ向はれ
 外は柳もや不覺人をも疑ひを論され沈吟もあつ宣へば定まらぬ
 蒙二部を招きよと彼処の中を問はん姫も問せありさいとく
 立んとま程よ次の間子人ありて校枝刀柄立ばわれその譯曲よぞえあけ
 ん疑ひを解くへは要時ありと呼留り且見姫ハ驚死あり
 閑せく主従存一これとつふこ蒙二部を有る伴の趣次の間は竊ま
 驚死憂ひく思念は業若む屈托の色蒼あくらあ芝打つ敷居にば進も
 入らば只身を又死頭と低く黙然とてついでり且く蒙二部ハ身を坐行と
 障子の裡面へ入りて後方とえり引闔と額と死姫入るを於研くつと
 毎礼とむが名め校枝とのもあらん今彼件の錯悞をまう鮮くとも

詮あくよは面がむ夏かれも水汲果て見参入へんと憶ひの趣
 ろち笑く隨ふ見饋物の軒ありと初知るとれ況毒を和れり夢ふ
 どもこれをあつた知られとめも通れり怒り釀しる苗ゆきゆれ
 夏の顛未報も人歎れをまめくは夏扱も一昨日未の比及僕もや鎌倉へ走
 着てはハ豫て案内はく知り彼若宮巷路の和田殿の第へめれ
 執接な件の下包を遞与せよ俟と一時許くその人再びゆく来つ折戸を
 女中ハあれも守戸といハ絶て名違ふわがやとそは終包を返されり
 僕もあつたあつた否のめり日も使ふ立守戸の局の死回翰を
 いそぐ六名の違ふ死といハその人訝りくあつたを誰殿の第ありと
 同し農此も礎議せ若宮巷路は隠れ死和田左衛門尉義盛殿の死
 第はあつたといハその人膝を敷くといハあつたを和田殿の

夏あつの破やぶれあやびく。その怨あまをむむと。曲まが報むかひを。彼かの地ちの趣おもむきを疑うたひを。み
 くれも。解とくら。れを。夫つま夫づまの兒こ疑うたひを。つるを。人ひとをま。蒙もう二に郎らうを鎮づく。
 梭かま枝えが言こともう。は言こともう。父ちち移うつりし。抑おさ此こ度たぎもう。夫つま夫づまへつ。消息そくしを進めし。官くわん府ふの西にしにある。
 違ちがひを。潜ひそびし。夏あつれば。中なか々々もう。謀まかりし。その仇あひ人ひとを知りし。何なんれに。向むかひを。
 許ゆるさず。兒こ素すもう。敵あひもう。八はち威い權けん高たかりし。そも。かく。もう。明あ々々地ちもう。夫つま夫づまもう。岳たけがう。
 されば。そも。命いのちを捨てし。その頸くびを齎しし。夫つま夫づま許ゆるさず。遣つかれん。や綴るを。
 偽いつはりありし。人ひとを殺しし。身みを立んず。かた刃やいばもう。伏ふせし。そも。縁ゆかり故ゆかりとあらはす。
 時とき政せい何なんれに。故ゆかりありし。夫つま夫づまをいいし。憎にくみし。彼かの柱はしら夏あつもう。必かならずとせんず。あれ。
 燈あかり据すりし。樽つづみもう。漫ままに。その名なを指さし。雙ふた言ことばもう。人ひとの鼻はなへあらはす。
 一ひとくも。あら。れに。そも。をあ。この怨あまをむむと。法はふと超人あま目めを竊くし。消しょう息そくを寄せし。
 ぞも。あら。れに。今いまとの。歎なげかれ。あら。れに。禍わざはひの胎たいていを推せし。浅あはれを。あら。れに。心こころをあらはす。
 ぞも。身みもう。怨あまをむむと。只ただ夫つま夫づまの為ためとの。あら。れに。彼かの飛と禽うまの鴉あひの喙くちばし。詠うたひを。詛うそ言ことば。
 水みづ澤さわの岩いわ。姫ひめ小こ松まつのの。操まことかんのの。濁にごりし。胸むねを著しし。仇あひもう。いい。易やすから。い。
 現いま月つきもう。日ひもう。人ひともう。照ありし。あら。れに。世よを捨てし。親おやを捨てし。良よ人ひともう。去されし。誰たれとあらはす。
 存たも命いのち人ひと絶たぬを。歎なげかれ。沈しづみし。冤あやもう。科かもう。あら。れに。人ひとの教おしりを。入いるを。草くさの原はら身みの果はたけとの。
 花はなの赤あか心こころを竟まし。夫つま夫づまもう。そも。石いし滴たみ再またびし。緑きぬもう。あら。れに。後のちの。
 世よもう。樂たのしみもう。あら。れに。南なん無む阿あ弥あ陀だ佛ぶつと唱へし。臂うで近ちかしし。掛かけし。置おけし。護まもりし。身みを奪取うばへし。
 授あづけし。放はなさんし。一ひと人ひとババ梭かま枝えハハ吐つきし。嗟あはれを。駭おどろし。携たづなりし。禁かぎ防ぼう卷まきのの。エエ降くだりし。涙なみだもう。息いき。
 つれあらはす。あら。れに。物もの体たいをし。姫ひめ人ひともう。あら。れに。心こころをあらはす。あら。れに。世よをあらはす。
 善よもう。惡わるもう。陽やう燄えんの命いのちありし。明あ澄ていハハ立たんず。素すもう。直ちからに。心こころをあらはす。彼かの神かみ日ひの神かみ。
 崇たかれし。幸あゆもう。累かさねもう。あら。れに。日ひの光ひかりもう。解とくら。あら。れに。雪ゆき霜しもの迹あともう。
 如ごとくあらはす。春はるといふ時といふ日を氣あら。けし。候あらはす。初はつもう。あら。れに。大おほくあらはす。此こ度たぎの。

ぞも身も怨をむむと。只丈夫の為との。あはれに彼飛禽の鴉の喙詛言。
 水澤の岩は姫小松のの操かんの。濁り胸を著しし。仇もい易か。
 現月も日も人も照りあはぬ世を親を捨て良人も去られ誰とあはす。
 存命人絶ぬ歎かれ沈み冤も科もあはれに人の教り入る草の原身の果と。
 花の赤心と竟まふ丈夫もあはれに石滴再び緑もあはれに後の。
 世も樂もあはれに南無阿弥陀佛と唱へ臂近し掛置れる護身刃を奪取て。
 授放さん一人バ梭枝ハ吐き嗟と駭恐り携り禁防卷のエ降る涙も息。
 つれあはす。あはれに物体をし。姫人もあはれに心をあはす。あはれに世をあはす。
 善も惡も陽燄の命ありと。明澄ハ立ん素も直らに心身を彼神日神。
 崇れ幸も累もあはれに日の見も解はあはれに雪霜の迹もあはす。
 如く梓弓春とらん時と日を氣あけ候せ多く初もあはれに大く此度の。

禁ざりしハ教わぬ身の賤は羞てとさびと伴りあつたをよと加んと
 始よりあつた幾通とく骨を冷せ苦しむとせしハ察しあつた
 家隸も一もぢは突詰ひ死の覚期を今又千萬諫をも用ひて
 わたし然びと今この身を放さば又死んごとく狂ひ多し人々の還るまじ
 ときを雲時按どく左の腕を膝を楚と引布く腰著る衣
 社を解き裂き口を引裂け製合くと且見姫の腕を背へ披揚れ
 うち立く位をのこす杖衝くまくと縛り出居の柱へかまめく繫ん
 程は後枝はうちんぐらむ驚死をもひんて蒙二の自殺と禁めん
 てもわめこれハ亦あつたの事軟物体か否とせと敦圍く布れ腕を
 び引脱拂わ立よを妨を突け腕を膝を楚と撲せ後枝は苦と
 叫び果を身を轉し倒れり怪枝は驚く蒙二郎ハ悔く彼ハ

大事の前あつたの小事あつたなり氣を失せも死に至り今介抱あつた時を移し
 送る刃を拾取りあつたの鞋は納め上座あり刀架は居置あつたの身と退り且見姫は
 うち對りあつた顔をつ死あつた姫人をも腹あつた只憎しと思召らぬ不敬非礼
 知りつてもあつた籠あつたは伝あつたハ命あつたは恙なく竟中多賀殿のわん疑ひも解て
 御夫婦再會の導者といん為かりあつた嚮あつたもたわびあつたく漫あつた第あつたと執あつた建あつたへ
 する僕が疎忽の科ハ死しと嘆あつたふもわねと見目前あつたく自殺あつた人ハ恥を
 知り義は仗あつた身の怒を貫あつたひたたま賀殿へ告あつたるはわねと見目前あつたくこの
 主は留あつたる聊後暗あつたくぬん身の明澄あつたと立あつたさんやあつたりあつたはあつたこの縛あつた
 妹伏の縁あつた絶あつたる只君御夫婦のあつた後あつたの日何ホの面目あつたわあつたる吉見殿あつた
 見参あつた死あつたる命運あつたのかく短あつたき歎あつたるも餘あつたりありあつたる諄言あつたは似あつたた僕



且見姫



杖を
掛て
蒙二
郎
且見
姫と
傳む

三三郎

かきえ

章五

元来異父の兄徳之助といふあり。そは孝友の故とて逐電して所在とあり。廿年来往方を索りて。きのみ夫口の渡りて。兄とて。これとも異なり。あもあもいふと。父との折れが名告も値に別れ。たれ聊便宜とゆり。鎌倉の小壺と浦太郎といふ。あもあもいふ。兄の徳之助。果敢に心あて。後日彼処へ起りて。おの遭んとあひり。このあもあも夫の妄念。浮世の夢と覺果て。今亦渡を死天三途。弘誓の舟に乗合。あもあもいふ。婆娑の心の迷へ。脚運りけく。殿共。信は鎌倉山は家造り。住つ死も比や。あもあもいふ。小壺の濱。浦太郎といふ。あもあもいふ。を。諸をせ。り。あもあもいふ。兄の死。あもあもいふ。と。僕が自殺の趣告を。あもあもいふ。只願。死か。あもあもいふ。の。父。あもあもいふ。の。死。身。を。愛。し。て。後。日。の。栄。を。俟。て。千。萬。の。事。も。盡。せ。ぬ。諄。言。を。あ。身。の。暇。を。あ。ら。ん。名。残。惜。し。を。い。ひ。り。背。向。あ。り。て。目。に。涙。を。流。し。せ。ぬ。哀。れ。あり。且。見。姫。の。夢。二。郎。が。自。殺。の。覺。期。を。目。あ。ら。ん。

この遺言を耳に受け。あもあもいふ。の。あもあもいふ。の。働。の。バ。轉。の。報。の。身。を。問。て。お。れ。々。の。黒。髪。の。十。行。の。涙。も。人。の。死。も。禁。り。の。を。泣。の。夢。二。郎。の。其。と。い。ふ。と。く。噫。痛。ま。と。と。あもあもいふ。の。心。を。鬼。の。手。に。送。り。西。と。り。仰。だ。く。又。恭。し。く。願。は。れ。鴻。恩。稟。ら。冠。者。御。夫。婦。心。の。足。ら。ぬ。某。と。い。ふ。く。お。び。り。召。て。大。田。の。莊。へ。赴。た。く。且。見。姫。を。慰。む。と。て。依。り。あもあもいふ。甲。斐。も。あ。く。あもあもいふ。恨。を。い。て。あもあもいふ。詞。も。あもあもいふ。の。世。の。あもあもいふ。の。主。後。の。あもあもいふ。の。縁。の。短。く。と。も。牛。車。あ。れ。馬。車。あ。れ。生。き。と。え。り。く。仕。へ。あもあもいふ。の。願。の。御。武。運。長。久。と。絶。ち。家。を。與。い。あもあもいふ。賀。殿。の。八。の。面。を。あもあもいふ。の。勸。解。を。あもあもいふ。の。あもあもいふ。の。是。時。の。不。祥。を。許。せ。と。い。ふ。と。あもあもいふ。の。北。の。方。も。あもあもいふ。の。對。ひ。朝。夷。の。今。生。の。辞。別。を。あもあもいふ。去。歲。の。春。も。あもあもいふ。の。御。庇。を。立。て。復。讐。言。の。本。意。を。遂。る。恩。義。を。あもあもいふ。の。時。と。い。ふ。と。あもあもいふ。の。別。れ。の。あもあもいふ。の。これ。も。冥。土。の。障。り。を。も。奠。く。首。歲。の。

疾走りて六合のまゝ名を揚ぐ三河の他の人々一旦惠を票たり。
 稻向のへいあまののしとほくくとむりて再び西より對ひ特本意の
 マダ舎元別れ一目のひあまも環りたんとあまの仇は流れ光陰の矢口の渡で外
 かく勲見方面影のあまのたてどく忘れもやぬ心の哀しき霧ぬ惑ひ雨夜の月の
 真如とやあまのねども悪は深き人の為は枉むるもせりしにかく非命は終る
 只是過世の業報歟ともかた死とあまの孝心篤たる兄は慈を以て死親の
 因果端を環りまゝかゝる身は報ひけん五逆十悪无量の罪も懺悔まゝに
 滅せりや濟せや阿弥陀佛弥陀仏々々々と念まれ諸行無常と告ぐるをま入想
 鐘の声月の檐より影は心の闇に照りて白昼のごとく明くるも藁三郎の
 次の間は措けり一行刀を引提来て棒四寸枝試みて取り取らんと右邊に著け
 られ素より村落の瘦百姓の子あられ腹切まを知らしむも美も悪も身を

劈はく死も難はくやあ然れども刀のく晴がやく物えり彼姫
 くの短刀を借りたりと身を殺さば便是姫人な撃れまもあがんかてを
 罪と贖えれ嗚呼あやかりと遠く守護刀を取そえと舊の処を坐を占つ
 諸肩祖はく枝杖つ刃の光は且見姫はあ禁えんと立あがる足え癱つ傳の麻
 織の索ありあは断れ他も曾よのこあめりて引留のれく屠居は撲地伏
 みのかろし程は藁三郎の膝は短刀の鞘推立く左は腹を拵くあまのあまえ
 かくあせりて意中よ工夫の眼を閉く要時念は六字の名號又短刀を取らり
 単衣の袖は巻箆で餘は刀尖五六寸夏を寒地豊城の霜乎氷乎明晃々
 くの刃の光り今ゆは眼を射られ膚撓るもいびい惆悵る志を勵しく
 力を究めく両をむらりて目織は左の脇腹へ刀尖貫刺と突立れば歳と漬る
 鮮血と共に要時よ堪ば苦と叫びく仰て倒れく苦む隨は旁側よ臥る

校枝が腹を足らぬ礎と衝く校枝ハ一声云て噓けり忽地これ復りて頭を
 撞身と起しく中ちくつ小と驚く声は蒙二即ハ羞るる苦痛を忍びて左を
 つ立膝折回しく起直る半身既ハ血を塗れく瘡口より頭れゆる大腸小腸
 膝を掩き松を垂る秋草若ハ掛り海藻を似たり食する刃ハ放さるる
 尚刺立る終ちも深疾れが息つれ又ハ校枝がめをく潜然と含泪せり
 近つ死意浅中一蒙二即とのあやむく刺さるるあやむくあやむくあやむく
 姫人の死歎を増とのあやむく又つとあやむく舊里の丈夫の弟ハ自殺すくハ
 忠義ハゆそ真中缺ち女子のあやむく恥を知る志は空しくハ義理やを
 易道あやむく後れゆんやとその身を責る必死の勢ハ蒙二即が側ハ
 措る行カと撥取く見りと技く呪を刺貫んとしと巻狂く乳の上四五
 寸をくせんと勝たつ鞘を握り俯るるあやむくあやむくあやむく校枝が自殺の形

勢ハ且見姫ハ立つ居つ絆ハ狂ハ意馬心猿走すんはけり身ハ隨ちハ喚
 被ハ及る声ゆ悲歎徒ハ魂疲れ伏沈る位より外ハ亦見志ハあやむく

後輯第四十八

今果の名對面
新鬼の新尼送

當下蒙二即ハ校枝を信とえりてあやむく死婦人の傷害甚かこの自殺の趣
 然ハ賀慶ハあやむく彼疑ハを解見ハ日ハ怜惻するあやむく校枝を便りて死
 姫人ハ任事んハあやむく求むくその死を急死ハ婦女子ハ相忘ハ名聞を
 好むあやむく且舊里の丈夫の弟といれハあやむく校所以をあやむく
 と問ハ僅ハ領せ今ハ何と云て隠死ハあやむくを死の舎兄總之助の妻かれと
 名音ハあやむく驚けり原來死身ハ校あり校ありハあやむく校ありハあやむく
 あやむく又何ホの故ハあやむく兄ハ二知ハ任事この莊院ハ任事又始り其を良人の

親と知る状を... 親一人... 親類を... 浦平... 親浦平... 是より海... 債ハ素... 鈎を求... 煙ハ細...

くも... 就この... 夫婦が... 来り... とど... 事情... 下... 憑... 必...

弟の家を譲りて為す故郷を去りしものあり。阿容ことごとく迎へんとす。生涯
 隠れし渠は遺下と云ふこれに誠あり。まがひはひら葉三郎と名告る人の
 ぐひあるとも。わが庭のわがくかへせり。いひてはるものゆか。娘はるる
 ありとも。これをもかん身の娘れと名告る。死後山難の尾上隔て伏せし形
 ぬれ世の形は身を敷く。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。娘はるる。
 鎌倉のりか叔母許秘密の使を奉りし。縁を繋ぎおん身はわかれ。今もあふ
 感ある。是より成就せん。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。娘はるる。
 元敷に今もあふ。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。娘はるる。
 勸解はよしも。死はあふ。共死の娘はるる。娘はるる。娘はるる。
 悲し。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。娘はるる。
 後悔の詮をいふ。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。娘はるる。

あり。過世の形。業報と素より賤れ身あり。あは幸か死に現常あり。
 心は痛む。死に娘はるる。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。
 隨死の死。あふ。女子は似げ。死に娘はるる。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。
 間中身入が還り。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。娘はるる。
 開くべし。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。娘はるる。
 惜る名残。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。娘はるる。
 あり。死に娘はるる。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。娘はるる。
 業日あり。あふ。雄。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。娘はるる。
 術沈む。あふ。葉三郎。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。娘はるる。
 微妙に烈女。あふ。今。いひてはるものゆか。娘はるる。娘はるる。娘はるる。

截とくくととと哀あしく又また憾うらしくあり。これ年来心こころを竭つく。舎兄あやうの往方ゆけを索たづね
つる志こころざしとゆい遂まげとく今いま自殺じこくせむのをかりて。嫂前あやしの自害じがいもとが疎忽そこくたり。こ
愆とがありし事こと起おこりし亦またこれごとく哀あれしやうとし舎兄あやうも又また嫂前あやしも或ある二案にあんお
けり或ハ途みちは相遇あひありも由縁ゆゑんを隠かくし面と背せけく心こころつくも今いまの日ひあらむ
徒ただは過すぎしゆひのゆとも亦また憾うらしくんや幾一いつ碗わんの糧じやうともく終は飢
渴のちくとも又また一領いつりやうの衣いともく交寒暑かんしよを凌ぐとも兄あやう弟あやし一いつ郷きやうをほひて
共侶あひなを世よを渡わたらぶがも憑たのりかず兄弟あやうともあひあらむた家いへを捨すてく
往方ゆけともあらむ弟兄あやうとも慕あこへども遂まにぬ値ぢで嫂の命いのちと縮ちぢみ弟を殺ころす。
只是過世こゝろの讐敵あやうが生なまり親おや子ことあり同胞どうたんとあり夫婦ふうふとあり天道てんどう
人ひとと殺ころすいんとも過世こゝろの業報ごうはうと觀かんされば恨うらみもあらずとハとも道で
別わかれし舎兄あやうとも弟あやしとも慕あこへしるも矢口やぐちの渡わたり遠外とんがいはえんあひし嫂前あやしで

訪とつくのとととと今いま辱はむく曉さとれども六日むいっぴちの昔蒲あやふよりなりや何なんぞせんと
悔くいしば校校がう閉とじし目めを睜とり現るうみ理り之きのみが伏せの来ませし
と死兄あやう弟あやしが忠孝あやう実まことを隨は潜や報す報すは伏せはあら感嘆えんしくとハ弟あやしが
實父まこと弟あやし苗四郎大人なえしやうの年とし枉死まがししゆを痛く哀しけれとハ弟あやしが
精悍しやうかんく仇の軀こころを刺さしと秋あきと美比みひ死し孝烈かうれつ之これは繼父けいふの枉死まがしとあらねが
復讐あやうのつらさく截父との為ために親を殺ころすと怨うらみを復たすのみゆ遂に妻の家いへの女むすめ
あらむ竟に薪水しんすい足たりぬと人ひとの奴婢ぬひが傭婦ようふとあらむかれがこれは謀まう謀まう二に郎らう及およば
からぬゆり遠くあらむのゆと渠りあらむ只ただ官くわん勸すすめく舊ふる里さと八はち相あ伴をんとと
いふれとも弟の功いさを竊む恥ありと且かつ義ぎをなすとも悪くも悪くも悪くも悪くも悪くも
兄あやう弟あやしが渠かあらむをいふといふれハ只ただ舎弟あやうともあらむ誠心まことこころならばいふと
ままとも弟あやしが告ぐとと斯うも諦あきらめずに迷の向答むかひこたへ良人らうじんはならずもあらむ未期みきの二に句く

ありふり今ハトも是表を三途の瀬踏をべんといひ刃を枝人へ渡さば
藁二郎を激してや侯也疾は浅より炎所を外れどくはあまかみ
まもも療治しく主君は仕人人を資く後の栄も遇あふやいせも果は頭
うち掉りありぬぬらうのまよふが身甲斐死すやと死なとせを辱ん
絶死とひ氣を張りて且もものいひハ死刃の惑ひを解んぬるまよとあふ
かれ魂ハ鎌倉よ起だく慶は彼文計を告訴歎れりく去れぬハハ姫人の
无実の科を釋ぶぬ死はもの甲斐死ぬものと變えは藁二郎は左を
小膝よ突立とこれあつてもあられ後れはせどと引抜く刃を取直はまきんて
駐るべくもあつたれ左の巻よ持をそと呪丁と搥切く刃を捨く控と俯せば
校枝も合さる刃の鏝よ生血と流く技採る刃直よ咽喉を刺事起くあだ
枕は俯るる時よ出居の腰障子と外面より颯と叩く忽ち地内よ入るの

あり便是別人かハ間中隼人守直へ引提る張燈を推抗く両箇の死骸を
左見右見く嗟嘆く邊く張燈を承塵の釘引掛く両箇の死骸を
且見姫の縛の索とを解捨くさめは勅りつ事の趣を答ふれば
且見姫ハ稍涙を飲めく大約この首尾藁二郎が鎌倉より来り来り
條ハ光仲の歌及軒のう藁二郎が諺く彼一包と時政の弟ハ齋蓮
や且との忠直校枝が節義或ハ自殺を禁ぬる身と柱へ懸糸は苗わくる
或ハみづろ非を責く俱に命を隕く後校枝藁二郎は倚壁心標今般小
いひの巻も涙をの報更ハ守直ハく母は且驚れ且感しむむを
息を吻とつれく某が来り来り比ハの兩人ハ自害しく救えくもあふ
のふととあふ引提り燈燭を遠離く霎時彼処に立在程は校枝
藁二郎が嫂ありし時のとあれりかく今又姫人のと死示させのふよりく

その苗の起る所被中忠親義死の逆曲は知り驚くものぞ
あつて惜むも返さずば多れども姫入恙ありあまの幸死中のまひし此度
鎌倉へ密使の某初より居るはあなも姫入の死を恨むを慰まわら
よひがもたは蒙二郎校枝が頻りにあそむ勸むるはれも篤義のあまはれ
愆とあまわらば彼龍潭は臨法は終り明珠と探りて又虎穴に入らば
虎子を獲るとあんとあひよるればその意は任し漫事を行はせ某も
亦予慮の二失後悔あま立くかり寔はこの義男節婦ハその身賤しんれども
その志貴く事な愆とあまその主と救ふ足まり當今ゆる死真成人あま
崇むるその死を急死ハ天とあいん命とあいん惜むく憐れく賞はく
悼はく姫入此度の窮厄ハ原是内々のあまは釋あまのあまらんあまの
あま歎死洗はあまの事難美ハこれのあま又一條の厄難あり某御ふ

鄰郡の莊官瀬越小権太右衛門尉の宿所へ赴は鎌倉より市別當は
稲毛太郎重平の功曹橋間若六と名告はあまの許多の火共をなく下向の瀬越
宿所は嘆きたり則某は對面してあま駿河前司廣綱のあま曩は陣中より
逐電して公命を幾如せしその料尤輕くは繼その壻賀光仲ありと
あまこれ亦死外を蒙りて和田左衛門尉は領けられりされは廣綱の
莊園ハ官府へ納めあまべ死のあま今よその義とあまあまの家祿はが
横領あま又光仲の内室且見姫ハ太田の莊院はありとあまけり夫光仲の
あま就く問せあま言あまらんあまはあまその家祿ハ太田の莊の券書は
捧げく且見姫より共よあま鎌倉へあまあまあまのあまのあまのあまの
あま執権の密意あま稲毛殿下知せられり衆台命は伏しも執権の
密意を察して斯德便の議を示はあま惑いとあまあま推菟く

擲捕ん後悔をて虎威を惜ら胡論の指南ハありけり某れどうの
 大田の荘ハ官府より宛行れぬあはれ故より廣綱の別業あり光仲
 その婿之廣綱の往方あるはどのにも光仲の指揮ありれば台余も從ひて
 倉へ進らせよと欲をせん下知ともあるをぬるに從光仲罪ありとも何れ女儀小
 軍中の多きとも向せんぬつやくありとゆへにささむ且見姫よまを告ぐ
 有無の答をさし入る今宵一々候あとの期を援へて退りたりか
 久さま途は情と思惟ふこハ只箱毛が執権へ使眉私意ありてさ
 沙汰のねども鄙語よ弱躬は崇あり四た処へ水も溜れば明日あ
 又回答とせはも苦六必推蒐來と狼藉及ぶ今宵姫うは俱
 彼伊豆の愛玉あり藍玉院へ走らせぬとあども苦六をかくれとあふ

大勢をねく必追々大厦の僵死とほつと一木の柱に死なつてハ
 死ひてあひは聊用ふ死あり死する校枝が頭をとて姫うへ自殺を
 ぬを偽りこれを苦六に遞与を渠実とて油断せんかぞ愛玉へ俱は道中
 後やとてと真とて密語は且見姫いつくこと涙とて謀ありと
 何とも吾侪のゆゑ小校枝が自殺せよと惜死は苟且も難を通れんを又
 その首どうの落させく仇のよも遞与んす忍びたるをさうあはれ箱毛
 亦是鎌倉へ引をぬれば親と良人のあはれ恥し死後れ今又ぬ不祥あり
 刃も伏せ易けれども校枝と蒙三郎志と否もささむとて死に箱毛
 亦も辱めしとつとせんともかくも丈夫の疑ひを解くも亦も素も清
 命かりれば菅浦の尼公請おうし尼もあんとあひを家尊の夫人の林を
 多賀殿は妻せられ過世短た縁ありけん祀せ罪あるれども勿心持者

尼とあは死前つ世の約束ありあらん頭六佛の道入りく丈夫の厄難
 消除と祈念しあは人々の菩提と吊んもバ丈夫の疑ひもみづる解せぬと世と
 か捨つてあひ家尊の大人もあやうあらんかををひ次やれといひ記し
 血は流る護身刀を取あげ頭髻を帯と剪り守直大に駭き勝て
 浅すやうあれば短慮の度あひるやこの幹の故をも多賀殿疑ひ
 とも正しく去らせあひはあは姿どうえををハ再會の日もあは杖す
 なる道世をか嗚呼何とせん悔歎け且見姫もあや落し涙と袖は禁む
 守直もあは憾もををせは法師もあは罪あは刑と宥めく免れどといひ
 されもこの頭髻と箱も功曹橋間とせん贈りか渠又過く鎌倉へ
 めく還んといふやあは道中後あは伊豆國愛玉の尼寺に赴はく住
 果んとともあはれ準備とせはあはあは守直頻に嘆息しと既かあは

どりつと禁めあはるその甲斐やあはれもこの元頭髻を苦六を取
 くと朽とれたあはれも其のあはる時とあは便と徹りく多賀殿は進
 せん又橋間苦六の杖が頭髻と剪取く欺けく姫の元頭髻とこれと
 逸と事両あはる全うへかあは死し杖も功ありこの儀は杖ひあは
 潜る小諫と姫の僅に領たて現杖が頭髻とめく仇と欺んと欲する杖
 あはあは人死せれば法師も請めく浴させ後剃りて杖は飲けあはれ
 謀り守直あはるは任せよとせれ吾侪がこの黒髪とす亦多賀殿よんせあは
 せんと欲はるとも杖杖葉二部も世と遊りて誰とあはる音能あはれ
 あはあはれこの終あはる速離らば事の情の迹もあは只丈夫のい
 怒る姿をかえりといひ見しと下筆とせん硯墨と引りく杖葉の
 服紗のうへあはる杖葉とせんあはれあはる杖葉とせんあはる杖葉

目録五編卷四

廿一

一歌と書つけく光仲より還される二通の尺素と像見の扇とを黒髪を伴の
 服紗は巻菴く通与史ハ守直これを受たりと賦て懐は交ある校技頭髪を
 剪取らんとく死骸のほり人立より折り忽然とく前裁の柴垣の海あり
 橋間若六隊兵とゆる真先は頭れをりこれ怎生を打拾と但見れば皮書やね
 品草哀の裏甲して腕は細鍵羅の臂縛透間もあくり領ひ足は鐵板の條
 脛衣も紫金装の大腰刀を佩れも白鐵の十手と頭短は握合して尚歩進
 近づれをれ守直嚮は汝が陳せし趣の期と延しく活路を求めん積せ
 かくれを迹と跟てまこの前裁の樹陰あり事の為体を且規へばりの
 程や人を殺して刺すの頭髪とよりくと上と欺んと欲はるをも大犯不赦の罪人かれ
 主従俱はとくゆる索と被れとゆる守直驕る氣色もく刀を取て信と疾視
 推参り橋間若六鎌倉殿を徴れてを辞しくあぬ駿河前司の莊院に

泥駁躑とく且見姫とゆる去らんとハ猿猴が水澤は臨とく月を掃ふ
 似う且汝が逼迫ハ執権の密意と称はる主の稲毛が私儀を不継辞と卑
 しく轎子とゆる迎ともは姫人と速とゆるとく還れと罵りて
 袴の稜とゆる脛高は引揚る勢ハ悍然も一個の敵をとおひ侮る若六ハ
 果さば頻り怒る物かいつを彼索被けをも敦國孝ハ夥兵們うけ
 ありとたも史はこれ相伏見と先と争ハ縁頬際と競蒐とをあくしやと
 守直ハ大刀を真額は技撃しと撃靡け巻振落は修煉の大刀風烈とそ
 當えくもゆらば捕まの大手辟易と或ハ縁頬と踏汁とく抑は
 あり或ハ卷石は跪死倒れと身方は踏まめりあり粒足もあつ慌忙と左
 印は靡くも見守直ハ且見姫と扶掖は亦立く面は廣庭へ走り
 庭門より脱去んとゆる程は若六諸折戸の小ハ見陰は立てりや遣は

声々々々撃閃を刃の光り守直も身と反りてありけり受流の込の
 大刃音丁々茂疾といふも烈火戦ひは苦六も春茶糸しく共共援を
 夥兵亦再び群るもあき晝叫く攻められし守直も怯まじ見姫を後方に
 引く右も當り左も柱へく且防戦の程は驚き懐きあり且見姫の髪を
 包の尻に送せし取あつ暇を苦六もえびと彼ハ證據はなれり
 兵共をとり取らぬと声あり立ち罵るを苦六もあつ一個の雜兵の包を
 搦取をくその尻閃りと投与を苦六も受とり守直もこれなまぬ怒り
 いそ包とり復ええ焦燥進を戦へどもその身金石なりわづれば腕疲れ
 目眩なく主とえく暇を敵ハこれ勢ひつらぬ鬼隔打重りく搦捕人と
 闘り苦六ハその間は且見姫も目とく立遠るやめ飛くを推さる
 奪ひ包と日衝く索を被んとくれば且見姫ハ禦だるく吐嗟と高く

叫びの声は驚く守直も竟は大刀えうち折られつ小刀を以柱に勢既
 究り脱れしとええ打く陰羅る雲月を隠しと朦朧とる隨は夏の
 夜風の常あわわ肌膚を犯し可あふとえれば母屋のかさりと西團比
 鬼燐閃火しく且見姫と守直が海より撲地と落さる風又廻を音
 苦六が口は衝服紗包を奪めごとく放ちて空を吹揚れば苦六ハ驚駭
 足を翹手を抗つ追追人との程は忽地は筋斗をく敵もあはれ投られ
 これハつゆと驚き騒ぐ捕まの天勢紛々と夥の敵討てく東は靡れ
 西は走りと同士撃つるの程は身と轉りて撞と倒れ起んとく又
 輾ぶあめく怪有の敗北ハ獨相撲は彷彿り守直も力をほく度失へ
 大敵を蒐散し追退けく苦六も響んとる刃を引く逃走を程
 追捨く且見姫を扶起しとくこの隙は落さるを引く誘引立庭門す

義男節婦
妙且見
姫を拯入



四十九

橋岡古六

岡中隼人

且見姫





光とほそく又舞と追首と聞く敵と守直信と見えさほほり近くも
 ありのそ投りて初のごとく就中苦六の頭と石を撲くと流と鮮血を禁めりて
 ありと叫びけりそん校枝と葦葉二郎が亡魂の頭れく夥の敵と蒐捕りて
 両個の姿は在鮮と且見姫の目のと見えり忠魂義膽の傳稀る死七の儀
 かまごまありけるもの歎とち泣く云と告更バ守直頭は感嘆とて原高個の
 亡魂が今宵の危難と救ひゆりかれが彼一色と空中吹揚られ今取ら
 由ありとも再びぬる日ありん送憾死かこれの心を校枝葦葉二郎が亡骸と
 歎ち葬りて暇あり年来住熟あせし莊院とこの供より捨て走らんよと
 朽ぞ死限りぬれども今ゆくせん忠を秀更とそつとぐつとくつとつと
 つとくつと後方子物の音はるを何あわんと訝りて主棧齊一又えれが
 出居のつと猛火起りて棟毎よとぬ火はるるの弱り伏る苦六の殿の捕共の



頭の上は落花のごとく降りける焰は焼れ煙は噓ぶ衆皆慌忙たつと
 ともつと叫びあへ起んとつとハ轉輾び逃んとつとハ跌倒倒る周章勝て
 つとつと脱るぬれぬの虫の火虫のこれと焼とどと狼狽騒々猛火の
 中は迷ひ入りて死するもの千人あり九人よ及べりそ中苦六ハ殿共幾も兩
 三人と辛く火を避れども髪と焼れ衣裳を焦しくとく先も見えたりん
 庭門ありハ如べり北のつと竹垣を推倒してぞ逃去りたる主棧遙にこれを見て
 是も亦彼亡魂が骸を自焼せんとて秋承塵を送せ張燈の火を殺し家を燔く
 夥の敵とてけん寔は不思議の義烈之南無阿弥陀佛と念ふ涙をば向の兵
 回向願生菩提と合掌の袖に露けた旅衣住方ハ伊豆の愛玉とよめられた魂の
 茶毘の光より死夜の路を求めく落るふあを果敢ぬ世たり。

朝夷巡嶋記全傳第五編卷之四終

朝夷巡嶋記第五編附言

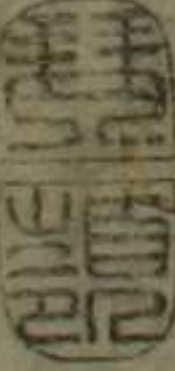
吾翁の藻を燦々毎小神速の如く泉の竭る如く筆下玉を琢せんと世人も皆よく知るるが如く又この編ハ初巻より第四の巻まで今茲臯月稿本成まり。介后酷暑焼がごとく秋来れども夕風稀この故に避暑の業を廢して四五ヶ月を過し程は年既は季冬に鄰て第五の巻ハいよいよ成らば書肆ハ時よ後ふとと彼ハ犬傳第四編の巻の足ぎう一例もあれが今刺果る四巻を致して願六早春敗んとり翁已とを始これと許しと余はそのやと識しむあれども第五の巻も昨既小終りれり年内刷人速は亦これども鑄出をバ西一帙五巻をるべくと考ふば第六編の巻の首は置んと今稿本を閱するハ第四の巻の終に至る義邦光仲木の黜陟ハその趣を盡しと第五の巻ありのちくあて義秀の進退を寫し出さぬハやとなん就中北越山中の奇談越中岩神の

再會をどこの編の専文ハとて第五の巻はあり今その蒙ハ成あがら此度の製本四巻は止らば作者の遺憾のこあはば閱者人々靴を隔く癡を搔くが如しといんあはば度允の巻数ハ多くあれ少くあれ唯この編は限るふあはば秋葉ハ必深谷は濃く名花ハ究て山後あり後編年々出を毎は看官のめく桂境に入るべし。

癸未春正月望の日

江戸

直亭驥徳識



編述

曲亭馬琴稿本



出像

一柳齋豊廣畫



浄書	江戸	田中正造
刷	京師	井上治兵衛
刊字校訂	大坂	市田治郎兵衛
	江戸	直亭驥徳
	浪華	魚
	初校	
	再校	

文政六年癸未春正月二日發販

刊行書肆

江戶馬喰町三丁目 書物問屋
筋違御外神田平永町 本屋
大坂心齋橋筋唐物町 書物問屋

若林清兵衛
山崎平八
河内屋太助

朝夷巡嶋記第六編 来未の骨 賣出中

同初編第五編 一編五 卷ツ、

里見大傳第五編 當午の春 賣出中

同初編第四編 一編五 卷ツ、

右先年... 文金堂

家傳神女湯 一包 第産前産後... 婦人の湯病... 用ひて急変を... 神の...

精製奇應丸 某程と云々... 功効... 大包代五... 中包代五... 小包代五...

熊胆黒丸子 婦人... 一包代六十四文 半包三十二文

弘所江 元銀田町中坂下... 同家神田明神下... 瀧澤氏製

取所... 大坂心齋橋筋唐物町河内屋太助

此本何ニカ様ニ

...

...

Handwritten characters in the upper left quadrant of the right page.

Handwritten characters in the upper right quadrant of the right page.

Handwritten characters in the lower right quadrant of the right page.

Handwritten characters at the top of the left page.

Handwritten characters in the middle of the left page.

Handwritten characters at the bottom of the left page.

Handwritten characters in the upper left quadrant of the left page.

Handwritten characters in the lower left quadrant of the left page.

